

心理臨床における事例研究に関する一考察 — 普遍性をめぐる議論と体験としての事例研究 —

千 秋 佳 世

I. はじめに

河合（2001）が「臨床心理学の研究においては、事例研究が極めて重要である。そのことは臨床心理の実際に従事している者にとっては自明に近いことである」と述べたように、日本の臨床心理学の歩みの中で事例研究は大きな意味を与えられてきた。事例研究は単なる研究の一技法ではなく、「臨床実践すなわち心理臨床からの臨床性・実践性を中心基盤にする画期的な学問」（藤原，2004）としての臨床心理学において、学問的アイデンティティを示すものでもあったと考えられる。しかしながら、こうした位置づけにも関わらず、事例研究をめぐっては臨床心理学の歴史の中で批判・検討が繰り返されてきた。

本研究では、日本における事例研究をめぐる議論を振り返り、改めて事例研究とは何かについて検討する。検討の手がかりとして、事例研究を「体験」として捉え直すことを試みる。臨床家が事例研究を行う際に体験することのひとつは、これまでの心理療法の経過やクライアントが生きてきた時間といった、膨大かつ不可逆な時間との対峙ではないだろうか。そのように過去の時間を辿り、事後的に検証するという点から、歴史学の知見を参照して事例研究を検討することも試みたい。

II. 日本における事例研究の歩み

1. 事例研究の展開

事例研究が日本の心理臨床においてこれほど重要なトピックとなった経緯については、山本（2011, 2018）、斎藤（2013）、東畑（2017）らに詳しい。そして、いずれの研究もその展開について語るにあたり、1970年代以降の河合隼雄の果たした役割を振り返ることから始めている。

1972年に京都大学に着任した河合は、1974年に京都大学心理教育相談室の紀要発刊に携わり、当時としては「ずいぶんな冒険」（河合，1977）として、事例研究論文を中心に掲載した。この試みは大きな反響を呼び、全国各地の大学院において事例研究論文中心の紀要が続々と刊行される動きにつながる。こうした流れについて、1977年に公刊された『臨床心理ケース研究1』掲載の河合隼雄・佐治守夫・成瀬悟作の鼎談では、「おそらく全ての原点みたいなものがケースだということ。…（中略）…いずれにしてもケース研究が必要であり、そこから臨床心理学がもういっぺん反省され、出発し直して、積み上げられてくる必要がある」（成瀬）、「ケース研究は、上澄みをすくうのではない。一人一人が実際に関わっている、そのことの研究」（佐治）として言及されている。そして、1982年に設立された日本心理臨床学会では、その学会誌である『心理臨床学研究』において、

事例研究論文を重視することとなった。このように、1970年代以降の事例研究をめぐる展開は、村瀬（1995）が、「ここ十余年、心理臨床の世界を特徴付けているのは『事例研究運動』であることに大きな異論はないと思われる」と述べるように、一つの大きなムーブメントとして広がっていったと考えられる。

こうした動きは、事例研究を中心に据える形で臨床心理学が再生を図った試み¹⁾であったとも言える。そして、アカデミズムの中に臨床心理学と事例研究を位置付けるにあたり重要であると考えられるのが、河合が1976年に発表した論文『事例研究の意義と問題点』である。ここで河合は、「事例研究は科学的論文としての『目的』をもつべきものであるという観点から、星野命²⁾が既に論じているがそれを参考にしつつ、ここに整理して述べてみよう」と前置きした上で、科学論文としての事例研究の価値について次のように記している。

- (1) 新しい技法の提示 事例を通して新しい心理療法の技法が示される。
- (2) 新しい理論・見解の提示 事例を通じて、新しい理論とその検証の過程を示す。あるいは、ある症状についての心的メカニズムの解釈などについて新しい見解を示す。
- (3) 治療困難とされるものの治療記録 これには結局 (1)、(2) のようなことが関連してくると思うが、治療が困難な事例の治療的可能性が一例でも報告されることは意味が深い。
- (4) 現行学説への挑戦 一応学界の通説となっていることを否定するような事例、あるいはそれに対する批判や修正を事例を通じて行う。
- (5) 特異例 これは二重人格とか、ある

いは残忍な殺人事件などの事例である。これは心理テストによる分析事例も含まれるだろう。

河合（1976）によるこの5箇条は、事例研究について論じる多くの研究で引用されているが、この論文を検討した山川（2015）は、「箇条書きのみが一人歩きして河合の真意がつかみ損ねられている」と指摘する。河合（1976）はこの箇条書きの後に次のように続けている。

以上述べたものに加えて、記述したような事実の集積としての意味をもつものが考えられる。更に、これは科学論文としての価値はあまりもたないかも知れないが、教育・訓練の過程に必要なものとしての事例研究が考えられる。つまり、初心者がひとつの事例を担当したとき、それを文章化することによって適切な客観化を行うことは、訓練という点で是非必要なことである。

つまり、河合（1976）による事例研究の意義は上記5箇条だけではなく、「事実の集積としての意味」と、「教育・訓練の過程に必要なもの」の2点が加わることとなる。しかし、さらに注目すべきなのは、事例研究の意義について「もう一度考え直す必要がある」と自らこれらの意義をいったん棄却している点である。その上で、「一個人の全体性を損なうことなく、その個人の世界を追求した結果は、臨床家が他の個人に接するときの共通のパターン、あるいは型を与えるものとしての普遍性をもつ」、「事例研究についてこのような意味を見出すならば、ひとつの事例研究が前節に述べたような(1)～(5)のカテゴリーにあてはまらなくとも、十分に論文としての意義をもつことが可能である」、「実

は事例研究の本質はここにかかっているとさえ考えられる」と述べている。すなわち、河合(1976)は、最初に自身が箇条書きで整理したような、従来の事例研究の意義を超えるものを提示しようとしているのであり、それは、徹底して個人の世界を追求した先に見いだされる普遍性であったと考えられる。山川(2015)は、こうした河合(1976)の新しい視点を、「個の追求から至る普遍性」と名付けている。

2. 事例研究の普遍性と実証主義からの批判

河合はその後、著書『心理療法序説』(河合, 1992)において、哲学者である中村雄二郎の近代科学に対する言説として「物事すべてを対象化して、自然的事物としてとらえる捉え方(中村, 1977)」を引用しながら、臨床心理学の科学性と事例研究の意義についてさらなる論を展開する。

なぜ事例研究は「普遍的」な有用性を持つのであろうか。…(中略)…心理療法は従来の「科学」とは異なるものである。臨床の知を築く上で極めて重要なことは、主体者の体験の重視であり、その「知」は内的体験も含めたものなのである。従って、その「知」を伝えるときは、事実を事実として伝えるのみではなく、その事実に伴う内的体験を伝え、主体的な「動き」を相手に誘発する必要が生じてくるのである。…(中略)…事実に加えて、内的体験に基づく臨床の知が伝達されることによって、個より普遍に至る道がひらかれるのである。

河合(1992)が示すのは、対象化して事実を伝えるのではなく内的体験も包含し、さらには伝える相手の中にも「主体的な『動き』」を誘発する事例研究の在り方である。しかし、それ

にはどのような事例研究の機序が働いているのかが問題となるだろう。ここで河合(1992)が導入したのが、「物語」という視点である。「優秀な事例報告が、そのような個々の事例をこえて、普遍的な意味をもつのは、それが『物語』として提供されており、その受手の内部にあらたな物語を呼び起こす動機^{ムーヴ}を伝えてくれるからなのである」と説明されている。また、心理療法の科学性という点からも、「人間の『科学』として主張するためには、事象を記載し、そこに何らかの『法則』を見出すことが望ましい。ただ、その際に、その事象に観察者の主観が組み込まれている、という困難な事情がある。このような主体の関与を前提とするとき、『物語る』ということが、もっとも適切な表現手段になると思われる」と説明している。つまり河合は、主観的に語られた物語が、次は聞き手の主観の中で新しい物語を呼び起こすという相互作用こそが事例研究の本質であり、事例研究が客観化・対象化を前提とした近代科学とは異なることを示したのである。河合(2001)では、近代科学の普遍性を「没主観の普遍性」、事例研究で得られる普遍性は主観と主観のからみ合いを通して得られる「間主観の普遍性」と表現するに至っている。

この「間主観の普遍性」は、事例研究の、そして心理療法の本質に関わる概念として考えられたが、東畑(2017)は、「心の深層には個々人を超えた『普遍的無意識』が存在するというユング派のアイディアと同型」であり、「河合の事例研究論や臨床心理学論は、骨がらみで力動的心理学の枠組みでなされたものであったと言えよう」と指摘する。海外に目を向けると、アメリカやイギリスの心理学全体の動きとしては、1970～80年代にかけて行動主義から認知心理学へと流れが移り、それに伴って認知行動療法が新しい心理療法として台頭した。この認

知行動療法は、それまで主流であった力動的心理療法とは異なり、客観的に効果を測定し、実証的であることを強調した点が特徴的である。日本における事例研究の展開は、こうした動きとは大きく流れを異にするものであったと言える。

こうした点から下山(2001)は、河合が行った事例研究センターの臨床心理学の再生について、「心理学全体からも離れ、また社会からも離れ、深層心理学を中心とした個人心理療法に基づく臨床心理学の再構築がなされた」と批判した。また、丹野(2001)も、「日本の臨床心理学において、事例研究の歴史的な意義は高かった」とする一方、「日本の臨床心理学には欠落している実証性」がいかに今後は重要となるかについて述べている。そして、新しい臨床心理学を築いていくためには、心理療法の効果研究としての実証的研究が必要であり、現行の事例研究では不十分で、「測定にもとづいた研究」が基本であるとしている。

3. ふたたび普遍性を考える

このように、「間主観的普遍性」という概念が河合によって提唱される一方、日本における事例研究の歩みは実証性という観点から批判を浴びることとなった。この批判の背景として斎藤(2013)は、「1990年代に医学/医療界に生じた、エビデンス・ベースト・アプローチの潮流が、心理学にも強く影響を与え始めた時期に一致する」と分析する。

米国心理学会(APA)の第12分科会を中心として起こったESTs(empirically supported therapies:実証的に支持された心理治療)運動は、大きな影響力を持って広がった。斎藤(2013)はこの動きについて、「一言で言えば『RCT(無作為割付臨床試験)で実証された治療法でなければ意味がない』とするような極端

な主張として受け止められる傾向があった。このESTs運動をめぐっては、米国においても、それを移入した本邦の臨床心理学界においても、大きな混乱があったと言わざるを得ない」と説明している。しかしながら、斎藤(2013)は続けて、2006年にはAPAよりEBPP(evidence-based practice in psychology:心理学におけるエビデンスに基づく実践)のコンセンサスが公表されたことにより、RCTのみが有用性を持つのではなく、単一事例研究であってもエビデンスに基づく実践に貢献し得ることが明言されており(APA, 2006)、事例研究の価値が否定されたわけではないことを説明している。混乱後のこうした落ち着きもあってか、エビデンスベースト研究が進んだ海外でも、事例研究を再評価する動きが生じている。野田(2014)は、McLeodらの研究(McLeod & Elliott, 2011)等を紹介しながら、その機運の高まりを示している。また、Fishmanらによるオープンアクセスの電子ジャーナルにおける事例研究のデータベース化の試み³⁾等も、この事例研究再評価のひとつとして考えられる。日本においても、斎藤(2013)による「実践科学研究」のひとつとして科学論的に事例研究を基礎づけようとする試みや、山本(2018)による自身の臨床経験に基づいた事例研究の意義と方法の提言等、事例研究を改めて捉え直し、位置付けようとする動きが生じていると言える。

そもそも事例研究の実証性や普遍性をめぐる議論は、古くから繰り返し検討されてきた科学における主観-客観の問題の系譜に連なるものであると考えられる。竹田(2015)は、19世紀半ば以降、哲学史の領域において、実証主義的な科学主義の立場から従来の哲学に対する批判が繰り返されたことを説明している。実証主義的立場は、客観的方法を適切に展開、発展させてゆけば、皆が共有できる正しい普遍認識

に到達するだろうという期待に満ちた観念として広がった。しかしその結果生じたのは、共通認識に至るところか、複数の学説の乱立と異説の対立による混乱であった。この混乱の根本には、Descartesの主張に端を発する主観-客観の一致問題が深く関わっており、それは、「人間が形成する一切の認識は、それがどんなものであれ、つまるところ主観の認識である。…(中略) …われわれ人間の認識は、どこまでも自分の認識を客観存在それ自身と参照することができず、したがってその『正しさ』を確認することはできない。それゆえ人間の認識は、原理的に対象それ自体を把握しえない」(竹田, 2015)という考え方である。実証主義の一方で極端に主観性を強調したのが、「正しい認識などどこにも存在しない」とする相対主義・懐疑主義である。行き詰まりを迎えた実証主義ではなく、主観に閉じて一切を否定してしまう懐疑主義でもなく、どうやって普遍性に到達すればよいのか。これが、19世紀半ば以降より人間科学が直面してきた命題と考えられる。

こうした経緯を踏まえると、事例研究について実証性という観点のみから批判するのは、科学史において既に繰り返されてきた実証主義と懐疑主義の対立構造をなぞるだけである。両者を止揚するような新たな普遍性へのアプローチが必要なのであり、河合隼雄が事例研究において模索した「間主観的普遍性」は、人間科学の命題に迫ろうとするひとつの試みとしても捉えられる。

このように、事例研究をどう考えるかという問いは、ひいては科学における普遍性に関わる問題となってくる。それは、科学という大きな枠組みにおいても今なお検証のプロセスの途上であり、事例研究についても今後もさらなる学際的な検討が必要であると考えられる。

Ⅲ. 事例研究という体験

1. 事例研究における時間—事後性を生きる

I、IIにおいて、日本における事例研究の展開を概観したが、ここからは視点を事例研究に取り組み我々自身に移したい。実践性を基盤とする臨床心理学において、事例研究の担い手は、日々実践に携わる臨床家である。その臨床家自身が事例研究を通じてどのような体験をしているかを考えることは、事例研究とは何か、ひいては心理療法とは何かを考える上での手がかりとなると思われる。

事例研究の体験として特に注目したいのは、研究を通して対峙することになる圧倒的な「時間」である。事例研究は一回一回のセッションの積み重ねの上に成り立つ。一回のセッションが50分の枠組みだとして、仮に50回で終結した事例の場合、実際にセラピストとクライアントが対面していたセッションの時間数としては50時間に満たない。だが、クライアントを迎える準備をし、毎回の終了後に記録を付け、考察し、次回に備える時間も加算すると大きく膨れ上がるだろう。さらに、そうした時間の背後には、クライアントによって語られてきた、あるいは語られなかったこれまでのクライアントの人生に相当する圧倒的な時間が存在する。一本の事例研究を執筆するという事は、そうした途方もない時間と対峙する体験であると言えるだろう。

研究者はそうした時間に相対しながら、クライアントの人生を辿り直し、心理療法の経過を再現して見直し、もう一度それらを生き直すような作業を続けると考えられる。それは一人の歴史家が、過去の出来事の真相を追い求めて史料を辿るような手続きにも近いのかもしれない。もちろん、過去の革命や宗教運動を対象とするのとは異なり、事例研究においては研究者

も当事者としてその歴史を担っており、そのまま体験を重ねることはできない点もあるが、事例研究を考える上で歴史学の知見から得られる示唆も大きいと考えられる⁴⁾。

例えば、イタリアの歴史学者である Ginzburg (1984/1993) は、歴史学の研究法や科学性について次のように述べている。

実験室というのが科学的実験のおこなわれる場所だとするならば、歴史家も研究者であるとは言いながら、歴史家には、定義からして、本来の意味においての実験をおこなう可能性は排除されている。革命や開拓者の事業や宗教運動を再現してみせることは、時間的に不可逆の現象をまさに不可逆のものとして研究する学問にとっては、実際問題としてだけでなく、原理的にも不可能なのだ。しかも、これはひとり歴史叙述のみに固有の特徴ではない——天体物理学や古生物学のことを考えてみるとよい。しかしまた、本来の意味においての実験に頼ることができないからといって、このことは、これらの学科のそれぞれが常軌的に証拠と見なされているところのものに立脚した独自の科学性の基準をつくりあげることの妨げにはならない。

歴史学と同様に事例研究も、既に過去となった心理療法過程を振り返るという点において、事例研究もまた、Ginzburg が述べる「不可逆の現象をまさに不可逆のものとして研究する」学問と言えるだろう。どちらもレトロスペクティブな研究であり、あらかじめ要因や水準を整理して臨むことは不可能である⁵⁾、膨大で混沌とした時間と過去史料に丹念に向き合い、徹底して事後性を生きながら、歴史学では過去の

出来事の本質に、事例研究では心理療法において展開していた真理に、少しでも迫り、描き出そうとしていると考えられる。

3. 客観的事実と「ゆがんだガラス」

なお、歴史学の分野においても、II-3において言及したような実証主義と懐疑主義による科学的普遍性についての議論が行われてきた。遅塚 (2010) によれば、第二次世界大戦の前後から、独立した存在としての事実という観念を疑問視ないし否定する見解が広まってきたという。それは、「研究者の主観や先入観を取り去って虚心坦懐に資料を吟味すれば、過去の事実が浮かび上がり、それを積み重ねれば、おのずから歴史の真実が見えてくる」(遅塚, 2010) という、19世紀の古典的歴史学に対する反省からであった。遅塚 (2010) は続けて次のように説明している。

実は、われわれが主体的に問いかけなければ過去の事実は何も答えてくれない(歴史学の出発点は過去ではなく現在である)、ということが歴史家の共通の認識になった。そうになると、問いかけ、選択、解釈、想定、といった主観的な行為こそが歴史学の営みだ、ということになり、事実なるものは、そういう営みから切り離された(独立した)存在ではありえない、ということになってくる。

こうした反省から、客観的事実が素朴に存在するという素朴実在論への批判が生じ、歴史的現実の認識不可能性を主張する懐疑論相対主義が誕生した。両者の対立は未だ「出口の見えない混迷のまま」(遅塚, 2010) であるという。懐疑論的相対主義のひとつの到達点として、ポストモダンの言語論的転回を背景とした「物語り

論」が挙げられる。物語り論の旗手としては歴史家の Hayden White や、日本では哲学者の野家啓一が知られているが、野家 (2005) は、「過去の出来事や事実は客観的に実在するものではなく、『想起』を通じて解釈学的に再構成されたものである」「過去の事実はいかなる手段をもってしても、それを今現在この場で知覚することはできないのである」と述べている。

しかし、懐疑論の相対主義や物語り論に対する批判の声も挙がっている。例えば遅塚 (2010) は、「事実の認識」と「事実の解釈」は区別しうることを示し、事実そのものが実在せず、歴史が「筋の通ったお話」でしかないのであれば、あらゆる反証や検討が不可能となる危険性を指摘している。また、Ginzburg (1999/2001) は、実証主義者 (素朴実在論) と懐疑論者の双方を批判し、「資料は、実証主義者たちが信じているように開かれた窓でもなければ、懐疑論者たちが主張するように視界をさまたげている壁でもない。いってみれば、それは歪んだガラスにたとえることができるのだ」と述べている。この「ゆがんだガラス」という考えについて、Ginzburg (1991/2003) では、次のように説明されている。

まずもって、歴史家たちはけっして現実に直接アプローチすることはできないのだということが強調されなければならない。彼らの作業は必然的に推断にもとづくものなのだ。歴史的証拠には無意的なもの (頭骨、足跡、食物の残り滓) もあれば有意的なもの (年代記、公証人証書、フォーク) もある。だが、どちらの場合にも、特別の解釈的枠組みが必要とされることには変わりはない。そして (後者の場合には) 証拠が構成されるさいに準拠した特別のコードに関係づけられる必要がある。どち

らの種類の証拠もゆがんだガラスにたとえることができるだろう。それらの内的なゆがみ (それが構成されるさいに準拠した、そして/あるいはそれが認知される際に準拠しなければならないコード) を徹底的に分析することなくしては、健全な歴史的復元作業は不可能なのである。しかしながら、この言明は反対方向からも読まれるのでなければならないであろう。証拠をそれが指示している対象の次元へのどのような参照もおこなうことなく純粹に読むことも、同じく不可能なのだ。… (中略) …現実をテキストとして研究せよという現在流行の指示命令は、どのようなテキストもテキスト外的な現実への参照なくしては理解されえないという自覚によって補完されるのでなくてはならない。

ここでの「ゆがんだガラス」という捉え方について、上村 (2001) は実証主義と懐疑論の相対主義を「止揚しうるもの」として説明している。

Ginzburg が言うように、歴史家も事例研究の研究者も、直接、過去の現実にアプローチすることはできない。今この時点から、研究者が主体的に過去について問いかけなければ、何も描き出すことができない。それは主体的であると同時に主観的な、「ゆがんだガラス」を通じた行為かもしれないが、今ここから過去を捉えようとすることは、そうした内的なゆがみを必然的に内包すると考えられる。そうであれば、実証主義の立場から、そのガラスがいかにゆがんでいるかをあげつらっても意味は無い。

また同様に、懐疑論者の立場から、ガラスの先には何も実在しないと主張することもできないだろう。これを事例研究の文脈で捉えてみると、事例研究はあくまでクライアントとセラピ

ストが重ねてきた毎回のセッションの实在を前提としたものである。クライアントの主訴や生育歴、毎回の語り、そうした实在する証拠（根拠）の上で、セラピストは事例研究を行う。もちろんそれら証拠はセラピストの主観により捉えられたものであり、「ゆがんで」いるだろうが、だからと言って、全てはセラピストの主観や創造の産物であると主張する研究者はいないだろう。事例研究を行う者は、当たり前のことだが、他者からの検証を要しない「筋の通ったお話」（遅塚, 2010）を作りたいわけではなく、心理療法において何が展開していたのか検討し、考察することを目的とするのである。

3. 心理療法の「終わりのなさ」と「集合知」への参入

次に、事例研究論文を書き終え、公表するという行為の意義について考える。

田中（2006）は、心理療法の終結をめぐる論考の中で、Jungの「個性化の過程」やFreudの「狼男」の症例を検討することを通し、「分析や心理療法はあくまで、そのような「個性化の過程」の途上にある個人の心理的変容を生涯にわたって促進するひとつの手段であり、「ある問題が解決したから」「ある症状がなくなったから」ということだけを根拠にその終結が云々されるようなものではない」と考察している。さらに田中（2006）は次のように述べている。

身体医学と違って、心理療法は最初から、ある地点に「始まり」があってまた別の地点に「終わり」があるような線形的な地平には身を置いていない。心理療法が開かれているのはあくまで、「始まり」が「終わり」であり、「終わり」が「始まり」であるようなウロボロスの地平であり、その意味

では（心理学的に言えば）、心理療法は終わることはできず、始まることしかできないのである。

このように、心理療法が本質的に「終わることができない」とするならば、事例研究論文を書き上げたとしても、内的にはその心理療法により生じた変容は継続され、何らかのピリオドを打つということにはなり得ないと考えられるだろう

そうであるならば、改めて、事例研究を書き公表するという行為の意義はどのように考えられるだろうか。河合（1976）が『事例研究の意義と問題点』において論じた中のひとつには、「事実の集積としての意味」が挙げられていた。クライアントとセラピストがいかに出会い、心理療法がどのように展開していったか、そうした一つ一つの知見が集積され、心理臨床の集合知が形成されていくとも理解できる。事例研究を公表するという行為は、この集合知の中に自らを投げ入れる行為、参入としても捉えられるのではないだろうか。

4. 事例研究を読むという体験

最後に、事例論文を読むという体験にも触れておきたい。批評家であり芸術家でもある港（2001）は、Charles Sanders Peirceの記号論を参考としながら、「見ること」とはどういう営みなのかを考察している。何らかの痕跡が残されたとき、一般的には「原因—結果」の二項関係の因果律として理解される。例えばタバコの灰が落ちていればその場所で喫煙した誰かがいたのだろうし、指紋が発見されれば、その指紋の持ち主を同定しようとする。しかし、痕跡という現象は、因果律だけで理解できるものではないと港（2001）は主張する。その痕跡を観察する第三者の状況に応じて、意味が変わって

くるからであり、痕跡を残す主体（原因）とそれが観察された表面（結果）、それを観測し解釈する主体（観測者）の三項の関係の中から生成するのが痕跡という記号であるとしている。痕跡が一義的な因果律では理解できず、「痕跡を前にして、それをどのように評価し、どのような物語＝歴史に配置するか（港、2001）」という、第三者による解釈の幅を持っている。こうした三項関係であるがゆえの不定的/非規定的性質が、「見ること」の本質にある。

そうであるなら、心理療法の「痕跡」としての事例研究に対するとき、読み手は受動的な存在ではあり得ないだろう。先述の通り河合（1992）は、事例研究は読み手の内部にも、あらたな物語を呼び起こす動機（ムーヴ）を伝えてくれるものと説明した。しかしそれは、物語をナイーブに享受するただの消費者でいては生じないのではないだろうか。読み手もまた、心理療法過程において何が展開されたのかを能動的に読み取り解釈する、主体的な関わりを行っていると考えられる。

IV. おわりに

本論では、前半において、日本の事例研究の歩みについて主にその普遍性をめぐる議論を中心として概観した。河合隼雄が提示した個から普遍性へ至るという事例研究の位置づけは、臨床心理学の科学性と学問的アイデンティティにも関わる重要な論点となった。それはまた、臨床心理学の分野のみに限らず、未だ答えの出ない、科学が歴史的に直面してきた主観性と客観性の問題にも通じることを指摘した。

後半では、事例研究において一人の研究者が何を体験しているのかという視点から事例研究を検討した。着目したのは、事例研究に取り組む上で対峙せざるを得ない膨大な時間の集積で

ある。さらに、不可逆な事象をレトロスペクティブに扱うという共通点から、歴史学の知見を参照して検討した。また、事例研究を書き上げることは、心理臨床が蓄積してきた集合知へ参入することでもあり、その事例研究の読み手も受動的な消費者であることはできず、主体的な関わりを行っていることが示唆された。

注

- 1) 1969年開催の日本臨床学会第5回大会において、臨床心理士資格化の進め方について疑義が出されたことを皮切りにし、学会内の方針をめぐって紛糾が続いていた。「これ以降、日本臨床心理学会は、臨床心理活動の社会的側面を重視し、学会を社会運動の組織として位置づけていくことになった。それにともない学会は、患者を含めた社会闘争組織としての色合いを濃くしていった。しかし、そのような方針に馴染めない学会員も多く、会員は激減し、学会の規模も活動も限られたものとなった」（下山、2001）
- 2) 星野命（1970）. 事例研究の意義と諸問題. 片口安史・星野命・岡部祥平（編）. ロールシャッハ法による事例研究. 誠信書房. pp.223-233.
- 3) *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*.
- 4) Allport（1942/1970）は、個性記述的な心理学のアプローチ法について、歴史科学との近似性に注目している。
- 5) 独立変数をコントロールした実験的な事例研究もあるが、ここでは一臨床家が日々の臨床で出会う事例を研究する場合を想定する。

文献

- Allport, G. W. (1942). *The Use of Personal Documents in Psychological Science: Prepared for the Committee on Appraisal of Research*. New York: Social Science Research Council. 大場安則（訳）（1970）. 心理学における個人的記録の利用法. 培風館.
- American Psychological Association, Presidential Task Force on Evidence-Based Practice. (2006). *Evidence-based practice in psychology*. *American Psychologist*, 61 (4), 271-285.
- 遅塚忠躬（2010）. 史学概論. 東京大学出版会.

- 藤原勝紀 (2004). 事例研究法. In. 大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦 (監修). 丹野義彦 (編). 臨床心理学全書5 臨床心理学研究法. 誠信書房. pp.19-64.
- Ginzburg, C. (1984). Prove e possibilità. In Natalie Zemon Davis. (1984). *Le Retour de Martin Guerre*. Giulio Einaudi editore s.p.a., pp.129-54.
- 上村忠男 (訳) (1993). 解説——証拠と可能性. In. 成瀬駒男 (訳). マルタン・ゲールの帰還——16世紀フランスの偽享主事件. 平凡社, pp.253-305.
- Ginzburg, C. (1991). Checking the Evidence: The Judge and the Historian. *Critical Inquiry*, n.18 (Autumn 1991), pp.79-92. 上村忠男 (訳) (2003). 第3章 証拠をチェックする一裁判官と歴史家. In. 歴史を逆なでに読む. みすず書房, pp.78-98.
- Ginzburg, C. (1999). *History, Rhetoric, and Proof*. University Press of New England : Hanover and London. 上村忠男 (訳) (2001). 歴史・レトリック・立証. みすず書房.
- 星野命 (1970). 事例研究の意義と諸問題. 片口安史・星野命・岡部祥平 (編). ロールシャッハ法による事例研究. 誠信書房, pp.223-233.
- 河合隼雄 (1976). 事例研究の意義と問題点——臨床心理学の立場から. 臨床心理事例研究 (京都大学教育学部心理教育相談室紀要), 3, 9-12.
- 河合隼雄・佐治守夫・成瀬悟策 (1977). 鼎談「臨床心理学におけるケース研究」. 臨床心理ケース研究編集委員会 (編). 臨床心理ケース研究1. 誠信書房, pp.232-235.
- 河合隼雄 (1992). 心理療法序説. 岩波書店.
- 河合隼雄 (2001). 事例研究の意義. 臨床心理学, 1 (1), 4-9.
- 河合隼雄 (2003). 臨床心理学ノート. 金剛出版.
- McLeod, J., & Elliott, R. (2011). Systematic case study research: A practice-oriented introduction to building an evidence base for counselling and psychotherapy. *Counselling and Psychotherapy Research*, 11 (1), 1-10.
- 港千尋 (2001). 洞窟へ——心とイメージのアルケオロジー. せりか書房.
- 村瀬孝雄 (1995). 臨床心理学の原点——心理療法とアセスメントを考える. 誠信書房.
- 中村雄二郎 (1977). 哲学の現在. 岩波書店.
- 野田亜由美 (2014). 研究法としての事例研究——系統的な事例研究という視点から. お茶の水女子大学紀要, 16, 45-56.
- 野家啓一 (2005). 物語の哲学. 岩波現代文庫.
- 斎藤清二 (2013). 事例研究というパラダイム——臨床心理学と医学を結ぶ. 岩崎学術出版社.
- 下山晴彦 (2001). 日本の臨床心理学の歴史と展開. 下山晴彦・丹野義彦 (編). 講座臨床心理学1 臨床心理学とは何か. 東京大学出版会, pp.51-72.
- 竹田青嗣 (2015). 人文科学の本質学的展開. 小林隆児・西研 (編著). 竹田青嗣・山竹伸二・鯨岡峻 (著). 人間科学におけるエヴィデンスとは何か——現象学と実践をつなぐ. 新曜社.
- 田中康裕 (2006). 心理療法は終結を目指しているのか?. 臨床心理事例研究 (京都大学教育学部心理教育相談室紀要), 33, 22-24.
- 丹野義彦 (2001). 臨床心理学研究の実証的方法. 下山晴彦・丹野義彦 (編). 講座臨床心理学2 臨床心理学研究. 東京大学出版会, pp.25-37.
- 東畑開人 (2017). 日本のありふれた心理療法——ローカルな日常臨床のための心理学と医療人類学. 誠信書房.
- 上村忠男 (2001). 訳者解説. Ginzburg, C. (1999). *History, Rhetoric, and Proof*. Hanover and London: University Press of New England. 上村忠男 (訳). (2001). 歴史・レトリック・立証. みすず書房, pp.197-212.
- 山川裕樹 (2015). 河合隼雄「事例研究の意義と問題点」の真意とその引用. 心理臨床学研究, 32 (6), 705-710.
- 山本力 (2011). 心理臨床実践と事例研究. 山本力・鶴田和美 (編). 心理臨床家のための「事例研究の進め方. 北大路書房, pp.2-13.
- 山本力 (2018). 事例研究の考え方と戦略——心理臨床実践の省察的アプローチ. 創元社.

Abstract

The Case Study Method in Clinical Psychology: An Evaluation of Universality and Case Studies as Experiences

Kayo SENSHU

The purpose of this paper is to examine the case study method in clinical psychology. I conducted a literature review of discussions about the case study method in Japan, before considering the various viewpoints emerging from our experiences in case studies.

In Japan, Kawai Hayao highlighted the importance of case studies by emphasizing that because clinical psychology was based on clinical practice, we should pursue individuality through case studies. It also meant that clinical psychology was developed as a new science that placed importance not only on scientific evidence but also on subjective experience. Kawai emphasized the universality of case studies which included both the client's and therapist's subjectivity. Subsequently, this led to the proposed idea of "inter-subjective universality," leading to the debate on the universality of case studies. Some researchers claimed that scientific verification was indispensable, and found global support for their justifications in the trends of evidence-based approach. Therefore, difficulty persisted in establishing a common recognition of the universality of case studies in clinical psychology. However, it is important to consider this issue through a wider interdisciplinary perspective.

In the second part of this paper, I considered case studies as subjective experiences. First, I considered the overwhelming amount of irreversible time invested in case studies. Case studies not only report the duration of clinical sessions but also the client's life history. I therefore referred to the experts within the field of historical science, because of the commonality of methods that needed to be analyzed retrospectively. For example, Carlo Ginzburg, a historian in Italy, suggested that irreversible time should be regarded through "a distorted glass." Then, I examined the meaning of the publication of case studies. It was considered as initiation to collective intelligence in clinical psychology. Finally, I discussed the experience of reading a case study report. It showed that it was a very independent act.

Keywords: Case study method, Clinical psychology, Universality